

『私の王、すべての王』（マタイ 2：1～12・ミカ 5：2）

【開会聖句】

ミカ

5:2 「ベツレヘム・エフラテよ、あなたはユダの氏族の中で、あまりにも小さい。だが、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その出現は昔から、永遠の昔から定まっている。」

<序論>

・クリスマス、おめでとうございます！！今朝の開会聖句にさせていただいた「ミカ」の時代から約 700 年後、救い主イエス・キリストはその預言の通りにベツレヘム・エフラテにお生まれになりました。それは永遠の昔から定まっていたことでした。

<本論>

1. ユダヤ人の王

ミカは神様のことばを伝える預言者でしたが、彼が残した預言の中で最もよく知られているのが今朝の 5 章 2 節のみことばでしょう。それは、メシア（救い主）誕生を告げ知らせる預言として、新約聖書の「マタイ」のクリスマス物語の中で引用されています。先程、呼んでいただきましたが、皆さんもよくご存じの、東方の博士たちの物語です。東の方からやって来た博士たちがヘロデ王（大王）に次のように言います。

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。私たちはその方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました」（マタ 2:2）。

この人たちは、ギリシア語本文では「マゴイ」と呼ばれ、ラテン語で「マギ」となり、伝統的に「博士」や「賢者」と訳されてきました。英語では「スリーキングス（三人の王たち）」と訳されているみたいですが、三人というのは、彼らが三つの贈り物を献げたことから推測されたもので、聖書には人数については何も書かれていません。また、王であったというのも、イエス様の誕生を、王たちがメシアに敬意を払うという旧約預言の成就として描きたかったということが背景にあったからだと考えられています。確かなことは、彼らが古代天文学の中心地であったバビロニア、ないしはペルシアから来た占星術師（星占い）で、はるか昔から、吉凶を占う天体観測を行っていた人たちであったということです。そんな彼らがやって来た目的は、「ユダヤ人の王」として生まれた方を礼拝するためでした。それはあくまでも「ユダヤ人の王」ですから、自分たちの王ではなかった。彼らは、言わば、よその国の王に会いにやって来たわけです。考えてみれば、それも不思議なことなのですが、彼らはとにかく星占いで

吉とされるような人物がユダヤの国で生まれると知って、それならば、ぜひ伏し拝んで、少しでもそのご利益に与りたいと考え、やって来たのでしょうか。

2. 別の道から

それで、ヘロデ王は祭司長たちに伺います。キリスト（メシア）はどこで生まれるのかと。興味深いのは、ヘロデは「ユダヤ人の王は」とは聞きませんでした。なぜなら自分こそがユダヤ人の王でしたから、自分の地位を脅かすような人物の誕生を認めたくなかったのでしょうか。そんなヘロデに祭司長たちは答えます。

『彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれています。『ユダの地、ベツレヘムよ、あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない。あなたから治める者が出て、わたしの民イスラエルを牧するからである。』』』（マタ 2:5～6）

この引用には「ミカ」と少し違うところがあります。それは「あなたはユダを治める者たちの中で決して一番小さくはない」という箇所です。これは、ベツレヘムは小さな町ではあるけれども、そこでメシアが誕生するのだから、決して小さな意味しか持たない町ではない、ということでしょう。ただ、祭司長たちは「ミカ」の預言を知っており、メシアが生まれる場所も知っていたのですが、その時は知りませんでした。否、今朝の祭司長たちに限らず、時を知るということは、どんな人にとっても難しいことです。昔、保険の仕事をしていた頃、お客様に説明する際に「万一の時」ということばをよく使いました。私たちには「万一の時」がいつ来るのかは分かりません。だから「万一の時」なんです、自分が何歳まで生きるのか、或いは大地震がいつ来るのか、確かなことは誰にも分からないのです。だから保険や年金に加入するわけですが、そんな不確かなことで損得を考えること自体、ナンセンスだと言えます。少し脱線してしまいましたが、私たち人間は、普通、時を知ることが不可能です。だから、今が大切だということになるんですが、今朝の物語では、不思議な神のご摂理によって、博士たちはその時を知ることができました。そして、彼らにその時を知らせてくれた星は、その場所まで彼らを導いてくれたのです。彼らはこの上もなく喜び、はるばる携えて来た宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を献げ、幼子を礼拝することができました。ただ、その後、夢でヘロデのところに戻らないようにと警告されたので、別の道から帰って行ったとマタイは記しています。この別の道からとは、来た時とは違う道からということですが、ただそれは、単に地理的に違う道で帰ったというだけではないように思えます。それは、彼らが来る時とは全く違う人間とされて帰って行ったことを強調しているように思えました。すなわち、彼らが幼子イエスを「ユダヤ人の王（よその国の王）」としてではなく、「私の王」と信じ受け入れて帰って行ったということです。日本人の多くは、少なくともイエス・キリストに対しては、悪い印象を持っていないかもしれません。特にこのクリスマスの時期には。クリスチャンでなくても、ケーキや色々なご馳走を並べて「メリークリスマス！」と言ってお祝いを

しますから。しかしそれは、「私の王、私の神」として、イエス様の誕生をお祝いしているのではなく、自分とは余り関係のない「ユダヤ人の王（よその国の王）」の誕生をお祝いしているんですね。けれども、イエス様は決して、私たちにとって「よその国の王（神）」としてお生まれになった方ではないのです。また、遠い昔の歴史上の偉人のような方でもありません。あの 2000 年前のユダヤのベツレヘムの小さな家畜小屋でお生まれになった救い主は、今の私たち、ご自分を信じる者たちに、新しいいのちを与え、神の子どもとして生きる道を示すために生まれてくださったのです。

<結論>

ですから、イエス様は、「私の王、私の神」であり、それだけでなく、「すべての人の王、すべての人の神」でもあるのです。私たちはそう信じています。「ヨハネ」1 章 9～13 節にそのことが証言されていますので、最後にそのみことばを読ませていただき、クリスマスのメッセージを閉じたいと思います。

『すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民をこの方を受け入れなかった。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである』（ヨハ 1:9～13）。